

# 物のいわれ

楠山正雄

青空文庫



目次

物のいわれ(上)

そばの根はなぜ赤いか

猿と蟹

狐と獅子

蛙とみみず

すずめときつつき

物のいわれ(下)

ふくろうと烏

蜜蜂

ひらめ

ほととぎす

鳩

## 物のいわれ（上）

そばの根はなぜ赤いか

—

あなたはおそばの木を知っていますか。あんなに真っ白な、雪のようなきれいな花が咲くくせに、一度畑に行つて、よくその根をしらべてごらんさい。それは血のようにな赤です。いったいおそばの根は、いつからあんなに赤く染まつたのでしょうか。それにはこんなお話があるのです。

むかし、三人の男の子を持つたおかあさんがありました。総領が太郎さん、二ばんめが次郎さん、いちばん末っ子のごく小さいのが、三郎さんです。

ある日、おかあさんは、町まで買い物に出かけました。出がけにおかあさんは、三人の

子供を呼んで、

「おかあさんは町まで買い物に行つて来ます。じき帰つて来ますから、三人で仲よくお留守番をするのですよ。戸をしつかりしめて、みんなでおとなしくうちの中に入つておいでなさい。ひよつとすると悪い山姥が、おかあさんの姿に化けて、お前たちをだましに来ないものでもないから、よく気をつけて、けつして戸をあけてはいけません。山姥はいくら上手に化けても、声が、しゃがれたがあがあ声で、手足も、松の木のようにながさがさした、真つ黒な手足をしていますから、けつしてだまされてはいけませんよ。」

「と、いい聞かせました。すると子供たちは、

「おかあさん、心配しないでいいよ。おかあさんのいうとおりにして待つているからね。」

「と、いったので、おかあさんは安心して出て行きました。」

ところがじき帰つて来るといつたおかあさんは、なかなか帰つて来ないで、そろそろ日が暮れかけてきました。子供たちはだんだん心配になつてきました。「おかあさんはどうしたんだろうね。」とみんなでいい合つていますと、だれかおもての戸をとんとたたいて、

「子供たちや、あけておくれ。おかあさんだよ。お前たちのすきなおみやげを、たんと買って来たからね。」

といいました。

けれども子供たちは、しやがれたがあが声をしているから、おかあさんではない。山姥が化けて来たにちがいないと思つて、

「あけない、あけない、お前はおかあさんじゃあないよ。おかあさんはやさしい声だ。お前の声はがあがしやがれている。お前はきつと山姥にちがいない。」

といいました。

ほんとうにそれは山姥にちがいありませんでした。山姥は途中で、おかあさんをつかまえて食べてしまったのです。そしておかあさんに化けて、こんどは子供たちを食べに来たのです。けれども、子供たちが入れてくれないものですから、困つて、村の油屋へ行つて、油を一升盗んで、それをみんな飲んで、喉をやわらかにして、また戻つて来て、とんとんと戸をたたきました。そして、

「子供たちや、あけておくれ。おかあさんだよ。みんなのすきなおみやげを、たんと買って来たからね。」

と良かったです。

こんどはそっくりおかあさんと同じような、やさしいいい声こゑでした。けれども子供たちこどもはまだほんとうにしないで、

「じゃあ、先さきに手を出だしてお見みせ。」

と良かったです。

山姥やまうばが戸とのすきまから手を出だしましたから、子供たちこどもがさわってみますと、それは松まつの木きのように節ふしくれだつて、がさがさしていました。子供たちこどもはまた、

「いいえ。あけない、あけない。おかあさんはもつとつるつるして柔やわらかな手てをしている。お前まえは山姥やまうばにちがいない。」

と良かったです。

そこで山姥やまうばは裏うらの畑はたけへ行いつて、芋いもがらを取とつて、手ての先さきにぐるぐる巻まきつけました。そして山姥やまうばは三度さんどめにうちの前まえに立たつて、とんとんと戸とをたたいて、

「子供たちこどもや、あけておくれ。おかあさんだよ。みんなのすきなおみやげを、たんと買かつて来たきからね。」

と良いますと、子供たちこどもは中ちゆうから、

「じゃあ、手をお見せ。ほんとうにおかあさんだか、どうだか、見てやるから。」  
といました。

山姥はまた戸のすきまから手を出しました。こんどは手がつるつるして柔らかだった  
ので、それではおかあさんにちがいないと思つて、子供たちは戸をあけて、山姥を中へ  
入れました。

## 二

おかあさんに化けた山姥は、うちの中に入ると、さっそくお夕飯にして、子供たち  
がびつくりするほどたくさん食べて、今夜はくたびれたから早く寝ようといつて、いつも  
のとおり末っ子の三郎を連れて、奥の間に入つて寝ました。太郎と次郎は二人で、おも  
ての間に寝ました。

夜中にふと、太郎と次郎が目を覚ますと、奥の間でだれかが、何だかぼりぼり物を  
食べているような音がしました。それは山姥が、末っ子の三郎をつかまえて食べてい  
るのでした。



「おかあさん、おかあさん、それは何の音ですか。」

と、太郎が聞きました。

「おなかですいたから、たくあんを食べているのだよ。」

と、山姥がいました。

「わたいも食べたいなあ。」

と、次郎がいました。

「さあ、上げよう。」

と、山姥はいつて、三郎の小指をかみ切つて、子供たちの居る方へ投げ出しました。

太郎がそれを拾つてみると、暗くつてよく分かりませんけれど、何だか人間の指のようでした。太郎はびつくりして、そつと布団の中で、次郎の耳にささやきました。

「奥に居るのは山姥にちがいない。山姥がおかあさんに化けて、三郎ちゃんを食べているのだよ。ぐずぐずしていると、こんどはわたいたちが食べられる。早く逃げよう、逃げよう。」

太郎と次郎はそつと相談をしていますと、奥ではもりもり山姥が三郎を食べる音が、だんだん高く聞こえました。

その時次郎は布団から頭を出して、

「おかあさん、おかあさん、お小用に行きたくなりました。」

といいました。

「じゃあ、起きて外へ出て、しておいでなさい。」

「戸があきません。」

「にいいさんにあけておもらいなさい。」

そこで太郎と次郎は逃げ支度をして、のこの布団からはい出して、戸をあけて外へ出ました。空はよく晴れて、星がきらきら光っていました。二人はお庭の井戸のそばの桃の木に、なたで切り形をつけて、足がかりにして木の上まで登りました。そしてそつと息を殺してかくれていました。

いつまでたつても、きょうだいがお小用から帰つて来ないので、山姥はそのそがしに出て来ました。明け方の月がちようど昇りかけて、庭の上はかんかん明るく見えました。けれどもきょうだいの姿はどこにも見えませんでした。さんざんさがしてさびれて、のどが渴いたので、水を飲もうと思つて、山姥が井戸のそばに寄ると、桃の木の上にかくれているきょうだいの姿が、水の上にはつきりとうつりました。

「小用こように行くなんて人をだまして、そんなところに上あがっているのだな。」

と、山姥やまうばは木の上を見上みあげて、きようだいをわかりました。その声こえを聞きくと、きようだいはひとぢみにちぢみ上あがってしまいました。

「どうして登のぼった。」

と、山姥やまうばが聞ききますから、

「びんつけを木になすって登のぼったよ。」

と、太郎たろうがいました。

「ふん、そうか。」

といつて、山姥やまうばはびんつけ油あぶらを取りに行きました。きようだいが上でびくびくしていると、山姥やまうばはびんつけを取とって来て、桃ももの木にこてこてなすりはじめました。

「それ、登のぼるぞ。」

といいながら、山姥やまうばは桃ももの木に足あしをかけますと、つるり、びんつけにすべりました。それからつるつる、つるつる、何度なんども何度なんどもすべりながら、それでも強ごうじよう情けんに一間けんばかり登のぼりましたが、とうとう一息ひといきにつるりとすべって、ずしんと地じびたにころげ落おちちました。

すると次郎が上から、

「ばかな山姥だなあ、びんつけをつけて木に登れるものか。なたで切り形をつけて登るんだ。」

と、いつて笑いました。

「そのなたはどうした。」

と、山姥が聞きますから、

「あなたは井戸のそこに入っているよ。」

と、次郎はいつてまた笑いました。山姥は井戸のそこをのぞいてみましたが、とても

手がとどかないので、くやしがつて、物置から鎌をさがして来て、桃の木のびんつけを

削り落として、新しく切り形をつけはじめました。山姥が桃の木に切り形をつけはじめ

たのを見て、きょうだいは心配になつてきました。そのうちどんどん山姥は切り形を

つけてしまつて、やがてがさがさ、やかましい音をさせながら登つて来ました。子供たち

は困つて、だんだん高い枝へ、高い枝へと、登つて行きました。とうとういちばん上ので

つぺんまで登つて行つて、もうこれより先へ行きようがない所まで登りましたが、やはり

山姥はどんどん上まで登つて来ます。困りきつてしまつて、二人は大空を見上げなが

ら、ありつたけの悲しい声をふりしぼって、

「お天道さま、金綱。」

とさげびました。

すると、がらがらという音がして、高い大空の上から、長い長い鉄の綱がぶら下がってきました。太郎と次郎はその綱にぶら下がって、するする、するする、大空まで登って逃げました。

山姥はそれを見ると、くやしがつて、同じように空を見上げて、

「お天道さま、腐れ縄。」

と大声を上げてわめきました。

するとすぐ、ぼそぼそという音がして、高い大空の上から、長い長い腐れ縄がぶら下がってきました。山姥はいきなりその縄にぶら下がって、子供たちを追っかけながら、どこまでもどこまでも登って行きました。するうち自分のからだの重みで、だんだん縄が弱つてきて、中途からぷつりと切れました。

山姥は半分縄をつかんだまま、高い大空からまつさかさまに、ちようど大きなそば畑の真ん中に落ちました。そしてそこにあつた大きな石にひどく頭をぶつつけて、たく

さん血を出して、死んでしまいました。その血がそばの根を染めたので、いまだにそれは血のように真っ赤な色をしているのです。

### 猿と蟹

ちようど田植え休みの時分で、村では方々で、にぎやかな餅つきの音がしていました。山のお猿と川の蟹が、途中で出会って相談をしました。

「どうだ、あの餅を一臼どろぼうして、二人で分けて食べようじゃないか。」

さっそく相談がまとまって、猿と蟹は餅を盗み出すはかりごとを考えました。

一軒のうちへ行ってみると、うち中の人が残らずお庭へ出て、ぺんたらこ、ぺんたらこ、夢中になって餅をつけていました。お座敷には赤んぼが一人寝かされたまま、だれもそばには居ませんでした。

蟹はその時、のそのそと縁がわからはい上がって行って、赤んぼの手をちよきんと一つはさみました。すると赤んぼはびっくりして、痛がって、「わっ。」と火のつくように泣き出しました。お庭に出ていた人たちは、どうしたのかと思つて、びっくりして、白も杵

も残らずほうり出して、お座敷へかけつけますと、もうその時分には、蟹はそのそ逃げ出して行ってしまいました。みんなは赤んぼがどうして泣いたのか、さっぱり分からぬので、ぶつぶついいながら、またお庭へ戻って行きますと、つきかけの餅が一白そつくり、白のままなくなっていました。みんなは二度ばかりにされたので、くやしがつて、外へ追っかけて出てみましたが、こんども何も見えませんでした。

蟹は坂の上まで行って、猿の来るのを待っていますと、猿は大きな白をころがしながらやって来ました。

「どうだ。うまくいったじやないか。さあ、食べよう。」

と、蟹がいますと、

「うん、なかなか重いので骨が折れたよ。だがこれですぐ食べては、楽しみがなくなつておもしろくないなあ。どうだ、この白をここからころがすから、二人であとから追っかけて行って、先に着いた者が餅を食べることにしよう。」

と、猿がいました。

すると蟹は口からあぶくを吹きながら、

「猿さん、それはだめだよ。駆けつくらをしたつて、わたしがお前になわなないことは分

かりきつていないか。そんないじの悪いことをいわずに、仲よく半分ずつ食べよう。」

と、こういいましたが、猿は聴かないで、

「いやならよせ。おれが一人で食べてしまおう。重い思いをして、白をかついで来たのはおれだからなあ。」

といいました。

「だって、わたしだって赤んぼを泣かして、みんなをだまして、お前にしごとをさせてやったのじゃないか。」

と、蟹がいました。でも猿は、

「ぐちをいうな。それよりか駆けつくらで来い。」

といつて、かまわず白を坂の上からころがしました。白はころころがって行きました。猿もいっしよに追っかけて行きます。しかたがないので、蟹もむずむずあとからはって行きますと、ちょうど坂の中ほどまで行かないうちに、餅は白の中からはみ出して、道ばたの木の根にひっかかりました。そして、白ばかりころころ下までころげて行きました。そんなことは知らないものですから、猿もいっしよに白を追っかけて、どこまでもころが



つて行きました。

蟹は途中、木の根に白いものが見えるので、ふしぎに思つてそばへ寄つてみますと、つきたての餅でしたから、「これはうまい。」と思つて、一人でおいしそうに食べはじめました。猿はせっかく下まで駆けて行つてみると、空白だったものですから、がっかりして、

「こちら、早く餅をころがさないか。」

と下からどなりました。すると蟹はあざ笑つて、

「つきたての餅が坂をころがるものか。今に堅くなつてお鏡餅になつたら、ころがしてやろう。」

といいました。猿は腹を立てましたが、自分からいいだして、したことです。しかたなしに蟹にあやまつて、おしりの毛を抜いて蟹にやつて、半分餅を分けてもらいました。それでいまだにお猿のおしりには毛がなくなつて、蟹の手足には毛が生えているのだそうです。

きつね  
狐と獅子

むかし、日本の狐がシナに渡つて、あちらのけだものたちの仲間に入つてくらしいていました。

ある時、けだものたちが、大ぜい森の中に集まつて、めいめいかつてなじまん話をはじめました。するとみんなの話を聞いていた獅子が、さもさもうるさいというような顔をして、

「だれがなんといつたつて、世界中でおれの威勢にかなう者はあるまい。おれが一声うなれば、十里四方の家に地震が起こつて、鍋釜に残らずひびがいつてしまう。」

といいました。

すると、虎が負けない氣になつて、

「なんの、おれが一走り走れば、千里のやぶも一飛びだ。くやしがつても、おれの足にかなうものはあるまい。」

といいました。

その時、日本の狐も、負けない氣になつて、

「どうして、からだこそ小さくつても、君たちに負けるものか。」

といばつていいました。

すると、獅子がおこつて、

「生意氣をいうな。ちつぽけな国に生まれた小狐のくせに。よし、そこにじつとしてい  
ろ。一つおれがうなつてみせてやるから。きさまのちつぽけな体なんか、ひとぢみにち  
ぢんで、ごみのように吹ッ飛んでしまふぞ。」

こういいながら、獅子はおなかに力を入れて、一声「うう。」とうなりはじめました。  
さすがにいばつただけのことはあつて、それはほんとうに、そこらに居る者の体ごと、吹  
き飛ばしそうな勢いでしたから、狐はあわてて、地びたに小さな穴をほつて、その中に小  
さくなつて、もぐり込みました。そして、うなり声はやむと、ひよいと中から飛び出して  
来て、

「なんだ、獅子さん、大そういばつたが、それだけのことか。ごみのように吹き飛ばされ  
るところか、このとおり貧乏ゆるぎもしないよ。」

とさんざんにあざけりました。すると獅子は、こんどこそ、ほんとうに体中の毛を  
逆立てておこつて、力いっぱい意気張つて、一声「うう。」とうなりますと、あんまり  
力んだひょうしに、首がすぽんと抜けてしまいました。狐は、そこでいよいよとくいな

つて、こんどは虎に向かい、

「どうしたね。わたしにさからえば、獅子だつてこのとおりだ。君もいかげんにおそれるがいいよ。」

「いいますと、虎はなかなか承知しないで、

「よし、そんなら千里のやぶを、かけっこしよう。」

「いいいただきました。狐は困った顔もしないで、

「うん、いいとも。」

「といって、さつそく競争の支度にかかりました。やがて一、二、三のかけ声で、虎と狐は駆け出したと思うと、狐はひよいとうしろから虎の背中に、のっかってしまいました。虎はそんなことは知りませんから、むやみに駆けるわ、駆けるわ、千里のやぶもほんとうに一ツ飛びで飛んで行ってしまいますと、さすがに体中大汗になっていました。するとそれよりも先に狐は、ひよいと虎の背中から、飛び降りて、二三間前の方で、

「おいで、おいで。」

をしていました。それで虎も勝負に負けました。

狐は大いばりで獅子の首を背負つて、日本に帰つて来ました。これが、今でも、お祭

りの時にかぶる獅子頭だということですよ。

蛙とみみず

むかし、むかし、大昔、神さまが大ぜいの鳥や、虫やけだものを集めて、てんでんが毎日食べて、命をつないでいくものをきめておやりになりました。何万という生き物が、そろそろ神さまの所へ集まって来て、めいめい、おいしい渡しを受けました。その中で、蛇は、いちばんおなかをすかしきつていて、ひよろひよろしていましたから、だれよりもおかれて、みんなのあとからのたりたりは行って行きました。すると、そのあとから、蛙がぴよんぴよん元氣よくとんで来ました。蛙はずんずん蛇を追いこして、

「蛇さん、ずいぶんのろまだなあ。おいらのしりでもしやぶるがいい。」

と悪口をいいながら、またずんずん行ってしまいました。蛇はくやくつてたまりませんけれども、どうにもならないので、だれよりもいちばんあとにおかれて、のろのろついでに行きました。蛇が神さまの前に出た時は、大抵の生き物が、それぞれ食べ物を持って、にこにこしながら、帰って行くところでした。神さまは、蛇がおかれて来たのをごら

んになつて、

「どうしてそんなに遅くなつたか。」

とお聞きになりました。そこで蛇は、おなががへつて、どうにも早く歩けなかつたこと、途中とちゆうで蛙があとから追いついて来て、おしりでもしやぶれといったことを残のこらず訴えました。すると神さまは、大そうおおこりになつて、いったん帰かえりかけた蛙をお呼びもどしになりました。そして、蛇に向かつて、

「蛙かえるがおしりをしやぶれといったのならかまわない。これから、おながのへつた時には、いつでも蛙かえるのおしりからまるのみにのんでやるがいい。」

とおつしやいました。そこで蛇は大そうよろこんで、いきなり蛙をつかまえて、おしりからひとのみにのんでしまいました。これで蛇の食べ物がきまつたので、神さまがお帰かえりになろうとしますと、小さな声で、

「もし、もし。」

と呼びながら、地の中から出て来たものがありました。それは、目の見えないみみずで、目が不自由なものですから、こんなに来るのに手間をとってしまったのです。

「もし、もし、神さま、わたくしは、何を食たべたらよろしゆうございましたか。」

とみみずがいました。神さまのお手には、なんにももう残ってはいませんでした。そこで、めんどうくさくなつて、

「土でも食べていろ。」

とおつしやいました。すると、みみずは不足そうな顔をして、

「土を食べてしまったら、何を食べましょうか。」

としつつこくたずねました。すると神さまはかんしゃくをおおこしになつて、

「夏の炎天にやけて死んでしまえ。」

とおしかりつけになりました。そこで、みみずは土を食って生き、夏の炎天に出ると、やけ死んでしまうのだそうです。

### すずめときつつき

むかし、すずめがせつせと鏡に向かつて、おはぐるをつけていますと、おかあさんが死んだという知らせが来ました。びっくりして、おはぐるを半分つけかけたまま、すずめはおかあさんの所へ駆けつけて行きました。神さまはすずめの孝行なことをおほめにな

つて、

「すずめよ、毎年まいねんこれから稲いねの初穂はつほをつむことを許ゆるしてやるぞ。」

とおっしゃいました。でもおはぐろは、つけかけたまま途とちゆう中でやめたので、すずめのかちばしは、いまだに下だけ黒くろくつて、上の半はんぶん分ぶんはいつまでも白いままです。

それとはちがつて、きつつきは、おかさんの死しんだ知しらせが来きても、鏡かがみに向むかって紅べにをつけたり、おしろいをぬったり、おしやれに夢むちゆう中ちゆうになつていて、とうとう親おやの死しに目めにああわなかつたものですから、神かみさまがおおこりになつて、

「お前まえは木きの中の虫むしでも食たべているがいい。」

とお申し渡わたしになりました。それできつつきはいつも木の枝えだから枝えだを渡わたり歩あるいて、ひもじそうに虫むしをさがしているのです。

## 物のいわれ (下)

ふくろうと鳥からす



むかし、ふくろうという鳥は、染物屋でした。いろいろの鳥がふくろうの所へ来ては、赤だの、青だの、ねずみ色だの、るり色だの、黄色だの、いろいろなきれいな色に体を染めてもらいました。鳥がそれを見て、うらやましがって、もともと大そうなおしやれでしたから、いちばん美しい色に染めてもらおうと思つて、ふくろうの所にやって来ました。「ふくろうさん、ふくろうさん。わたしの体を、何かほかの鳥とまるでちがった色に染めて下さい。世界中の鳥をびつくりさせてやるのだから。」

と、鳥がいました。

「うん、よしよし。」

とふくろうは請け合つて、さんざん首をひねつて考えていましたが、やがて鳥をどつぶり、真っ黒な墨のつぼにつつ込みました。

「さあ、これでほかに類のない色の鳥になった。」

とふくろうはいいながら、鳥を引き上げてやりました。鳥はどんな美しい色に染まったろうと、楽しみにしながら、急いで鏡の前へ行つて見ますと、まあ、驚きました、頭からしつぽの先まで真っ黒々と、目も鼻も分からないようになってはありませんか。

そこで鳥は、よけい真つ黒になつておこりながら、

「何だつてこんな色に染めたのだ。」

といいますと、ふくろうは、

「だつて外に類のない色といえは、これだよ。」

といつて、すましていました。鳥はくやしがつて、

「よしよし、ひとをこんな目に合わせて。今にきつとかたきをとつてやるから。」

とうらめしそうにいました。

その時から鳥とふくろうとは、かたき同士になりました。そしてふくろうは鳥のしかえしをこわがつて、昼間はけつして姿を見せません。

### 蜜蜂

むかし、むかし、大昔、神さまがいろいろの生き物をお作りになつた時に、たくさんの蜂をお作りになりました。そのたくさんの蜂の中に、蜜蜂だけが針を持っていました。蜜蜂は不足そうな顔をして、神さまの所へ行つて、

「ほかの蜂はみんな針を持っておりませんが、わたくしだけは針がありません。どうか針をつけて下さい。」

といいました。

「いいや、お前は人間に飼われるのだから、針はいらぬ。ぜひほしいというなら、針をやってもいいが、人間を刺すことはならないぞ。もし間違えて刺したら、針が折れて、命がなくなるぞ。」

と、神さまがおっしゃいました。

「けっして刺しませんから、どうぞ針を下さい。」

と、蜜蜂がいました。

「それなら針をやろう。」

と、神さまがおっしゃって、蜜蜂に針を下さいました。そこで約束のとおり、蜜蜂には針はあっても、人間を刺しません。刺せば針が折れて、命がなくなるのです。

## ひらめ

むかし、いじの悪い娘がありました。ほんとうのおかあさんは亡くなって、今のは後から来たおかあさんでした。それで何かいけないことをして、おかあさんにしかれると、おかあさんが自分をにくらしがってしかるのだと思つて、いつもうらめしそうに、おかあさんをにらみつけていました。

ところがあんまりおかあさんをにらみつけていたものですから、いつの間にか目がだんだんうしろに引つ込んで、とうとう背中の方に回つてしまいました。そして娘はひらめというお魚になつてしまいました。

そういえばなるほど、ひらめというお魚は、目が背中についています。ですから今でも、親をにらめると、平目になるといつているのです。

### ほととぎす

むかし、二人のきょうだいがありました。弟の方は大そう気立てがやさしくて、にいさん思いでしたから、山へ行つてお芋を取つて来ると、きつといちばんおいしそうなところを、にいさんに食べさせて、自分はいつもしつぽのまずいところを食べていました。けれ

どもにいさんは目が見えない上に、ひがみ根性が強かったものですから、「弟がきつと自分にかくしていいところばかり食べて、自分には食いあましをくれるのだろう。ひとつおなかを裂いて見てやりたい。」と思つて、とうとう弟を殺してしまいました。

けれども弟のおなかの中には、お芋のしつぽばかりしかはいつていませんでした。正直な弟を疑つていたことがわかると、にいさんは大そう後悔して、死んだ弟の体をしつかり抱きしめて、血の涙を流しながら泣いていました。

すると、死んだ弟の体から羽が生えて、鳥になつて、

「がんくう。がんくう。」

と鳴いて、飛んで行きました。

「がんこ」というのはお芋のしつぽということですよ。弟は「お芋のしつぽをたべている。」ということをし、「がんくう。がんくう。」といつて、鳴いたのでした。

すると兄はいよいよ弟がかわいそうになつて、これも鳥になつて、

「ほつちよかけたか、おつととこいし。」

と、鳴き鳴き弟のあとを追つて飛んで行きました。

毎年うの花の咲くころになると、暗い空の中で、しぼるような悲しい声で鳴いて飛び

まわっているほととぎすは、人によつて「がんくう。がんくう。」と鳴いているようにも聞こえますし、「ほつちよかけたか、おつととこいし。」と鳴いているようにも聞こえます。これは鳥になつたきようだが、やみ夜の中で、いつまでも呼び合っているのだということです。

鳩はと

鳩もむかしは親不孝で、親のいうことには、右といえ左、左といえ右と、何によらずさからうくせがありました。ですから、親鳩は子鳩に山へ行つてもらいたいと思う時には、わぎと今日は畑へ出てくれといいました。畑へ下りてもらいたいと思う時には、わぎと、今日は山へ行つてくれといいました。

いよいよ親鳩が死ぬとき、死んだら山のお墓に埋めてもらいたいと思つて、その時もわぎと、

「わたしが死んだら、川の岸の小石と砂の中に埋めておくれ。」  
 といひ残しました。

親鳩おやばとに別わかれると、子鳩こばとは急きゆうに悲かなしくなりました。そしてこんどこそは親おやのいつけにそむくまいと思おもつて、そのとおり河原かわらの小石こいしと砂すなの中に、親おやのなきがらを埋うめて、小さなお墓はかを立たてました。

ところが川のそばですから、雨あめがふつて、水みずがふえて、河原かわらに水みずが流ながれ出だすたんびに、小石こいしと砂すながくずれ出だして、お墓はかもいっしょに流ながれていきそうになりました。子鳩こばとはよけい親鳩おやばとをこいしがつて、ほっほ、ほっほといつまでも悲かなしそうになきました。

せつかく孝行こうこうな子供こどもになろうと思おもつても、親おやのいなくなつたのを、鳩はとは今いまでもくやしがつているのだそうです。





# 青空文庫情報

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年4月10日第1刷発行

※底本の「物のいわれ（上）」「物のいわれ（下）」をひとつにまとめました。

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年9月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 物のいわれ

楠山正雄

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>